

## E 職員（生活援護課 女性）

### 1. 派遣された期間

2月23日(金) ～ 2月28日(水)

### 2. 派遣された場所

輪島市 <sup>みい</sup>三井公民館

### 3. 担当した業務内容

公民館内で管理している支援物資の整理・在庫管理・発注・搬入  
支援物資を取りに来られた市民の対応  
公民館内で運用している仮設シャワーの運用・点検・整備  
仮設トイレの清掃

### 4. 派遣されたときの現地の状況

電気は使えたため、夜でも街灯は点灯し、室内でもエアコンで暖を取ることができた。  
上水道は飲用不可ではあるが使用できた。下水道は復旧しておらず、流しにも水を捨てられない状況。トイレは仮設トイレを使用した。

道路は至る所で地割れしていたが、アスファルトで簡易的に段差を埋める補修がされており、車で通行できた。段差の激しい部分には全て看板が立ち、注意喚起されていた。

倒壊した民家はそのままだになっていた。解体作業をしている様子を一度も見る事ができず、復興には途方もない時間がかかりそうだと感じた。

### 5. 被災者の様子

避難所での勤務ではなかったため、被災者と密接に関わることはなかったが、隣接する避難所で食料配給の手伝いをした際には、被災者同士が家族のように声を掛け合い、協力して作業をする様子が印象的だった。

### 6. 避難所の様子

食料に関しては、1日3食の配給があり、困ることは無い。メニューも毎回異なるもので、飽きないように工夫されていると感じた。しかし、野菜がどうしても不足するため、野菜ジュースを積極的に飲むように促す貼り紙がしてあった。

生活に最低限必要な物資は一通り揃っていたが、コーヒーやお菓子など一定の需要がある物品の在庫がなく、必要になれば市街地のお店まで行って、被災者自身で調達する必要があった。

## 7. 現地で困ったこと

公民館での仮眠時間は簡易ベッドで横になったが、慣れない環境で眠れず、疲労が蓄積してしまった。

仮設トイレは、定期清掃はしているものの臭いが気になり、落ち着いて使うことはできなかった。また、夜は真っ暗のなかでトイレを使用しなければならず、手持ちライトがあっても怖かった。

震度1レベルの地震が何度かあったが、倒壊した建物をたくさん見ていたので、自分も生き埋めになるかもしれないと考えると小規模の地震でも怖かった。

## 8. 派遣を終えて感想

発災から一定期間が経過しており、被災者の方々が予想よりも落ち着いて行動していた点に驚いた。派遣前は、悲しみに暮れる被災者がいたら、どのように寄り添っていいかということばかり考えていたが、派遣されてみると、大抵の方が気さくに明るく振る舞っており、逆に気を張って精神的に無理をしていなければいいなと心配してしまうほどであった。

もし大阪など都市圏で同規模の災害が起きた時は、人口も建物の密集度も異なるし、被害はさらに深刻になると感じた。自宅に数日間の食料を備蓄しておくなど、身近な部分から備えをしていかなければならないと感じた。

## 9. その他に気がついたこと

県民性の違いというか、支援物資を取りに来られた被災者の方と会話を交わす中で、自分の発した言葉が意図した意味とは違う意味で捉えられているような気がしたことが何度かあった。逆に、現地の方が発した言葉で少しびっくりしてしまうような経験もあった。(感覚の問題なので、うまく説明ができないのですが。)慣れ親しんだ文化が異なる者同士でコミュニケーションをとる事は難しいと感じた。

隣接する避難所のリーダーの方が「被災者も甘えてばかりではいけない」という趣旨の話をしていたのが印象的だった。ごく一部の被災者の中には、毎日のように大量に救援物資を持ち帰る方がおり、そういった方への対応に苦慮されている様子であった。我々としても、市民さんの対応をする中で、大量に物資を持ち帰る方に対しての声掛けは難しいと感じる部分があり、貼り紙で「1世帯〇個まで」等の制限をかけながら、均等に物資が行き渡るよう臨機応変に対応していた。